

『日本神道道統図』

— 吉備系巫女神道とヤマト系神社・国家・教派神道の比較年表 —

旧吉備王国(郷里岡山県および兵庫県、広島県、山口県など山陽地方)系巫女神道・巫女歌道 令和新時代 最終協力版

平成9年 巫女、社家子女、歌道家子女らが歌書や神儒仏の秘伝奥義の岩崎への相伝を開始し、岩崎が継承と調査研究を開始
平成23年7月6日 岩崎が本資料を起筆
令和元年6月2日

著作権法および『岩崎純一全集』第6巻に基づき、協力者の著作部分に係る著作権の全部の岩崎への譲渡が完了したことをもって、本資料を公表するため、最も早期からの作成資料『旧派歌道・歌学の流派・家元・団体の総覧』の名称を『日本旧派歌道流派総覧』に変更し、これを母体として、本資料を含むその他の資料と合わせた『岡山県巫女特別協力資料』を設置
令和元年8月14日 公開、令和元年11月9日 最終更新

筆頭編著者：岩崎 純一

(岩崎純一学術研究所所長、財団事務局長、大学非常勤講師等)

編纂総本部：岩崎純一学術研究所(IJAI)

編纂作業：同上第二学堂(『岩崎純一全集』編纂学堂)第一学廊第一学館第四学庭

編纂作業補助：同上第二女子学堂(『岩崎純一全集』編纂女子学堂)第一女子学廊第一女子学館第〇女子学庭～第九女子学庭

本資料群の編著者・協力者一覧

岩崎純一学術研究所(IJAI)
岡山県巫女特別協力資料

(1)『日本神道道統図』(『全集』第14巻 別添資料)

(2)『吉備・ヤマト相関図』(『全集』第14巻 別添資料)

(3)『吉備巫女神道・ヤマト皇統相関係図』(『全集』第32巻 別添資料)

(4)『日本旧派歌道流派総覧』(『全集』第92巻 別添資料)

(5)『日本旧派歌道流派系統図』(『全集』第92巻 別添資料)

『巫女神道比較表』(『全集』第14巻)

姉妹資料	『巫女神道探訪記 - 日本的アニミズム感覚の源流を訪ねて -』(『全集』第14巻)
	『大日本帝国陸軍歩兵第十連隊(岡山・鉄五四四八部隊)戦史調査資料』(『全集』第34巻)
岩崎純一学術研究所ウェブサイト (本資料群の掲載場所)	https://iwasakijunichi.net/
<p>※ なお、本資料群は、上掲の巫女や歌道子女らが所属する社家や神社、岩崎が協力している女子寮の閲覧室の一部でも入手できる。また、岩崎が非常勤講師や特別講師を務める大学の講義でも、適宜使用する。</p>	
参考文献(岡山県巫女特別協力資料の全資料の参考文献)	
Copyright (C) 2012-2019 岩崎純一 All Rights Reserved.	

岩崎純一学術研究所(IJAI)スタッフ

巫女(神道家・神道家子女)・歌道家子女スタッフ
本資料で解説しているスタッフ

一般スタッフ

序文 岩崎 純一 令和元年6月6日 筆

岩崎純一学術研究所(IJAI)は、本来は(現在も)岩崎純一個人や関係者の著作物の集合体である岩崎純一総合アーカイブ(IJCA)を統括管理する非法人のセルフアーカイビング機関である。

但し、所長・岩崎以外の主要スタッフはほとんどが女性であり、その多くが岩崎の出身地・岡山県の神道家・社家の巫女や歌道家の子女で占められる。このことは、岩崎と同郷であることに加え、IJCAの主要分野が人文系学問、とりわけ東洋哲学、日本思想、宗教学、精神病理学、心理学、和歌、古典・国文学であることによる。これらの巫女は、実際に(宮中祭祀以外の)現代の各神道関連祭祀に呼ばれて生活する立場であり、また岩崎も、和歌の実作によって巫女・歌道子女の文化維持に協力しているほか、一部の歌書や神道書・宗教書をこれらの巫女から託されている立場である。

しかしながら、現時点で私(岩崎)が交流することのできる巫女神道家の子女は、明治の巫女禁断令、世襲社家の禁令、天社神道禁止令などの陰陽道禁止令、修験道の禁令などの「淫祠邪教」弾圧の国策によって巫女、世襲社家、陰陽師、修験者などが壊滅的となった後も、密かにその神懸り神事、呪術、巫女舞、磐座祈祷、神剣演舞などを秘儀秘伝化・霊学化して生き残った人々に他ならない。そのほとんどは、女系の巫女神道家であり、歌道家を兼ねる。

しかも、これらの秘伝女系巫女神道のほとんどは、旧吉備王国の版図内(岡山県および山陽・瀬戸内海沿岸地域)に集中して残っている。そして、宮中祭祀には、一部の巫女を除いてほとんど呼ばれず、事実上、宮中参殿を禁じられている。これは、その吉備王国が、出雲と共に最後までヤマト王権・現皇統と戦って敗れた国であったことと無関係ではない。そのような巫女の怨念を根源とするシャーマニズムのみならず、男性教祖までもが天啓を受けたとしてシャーマン化した創唱宗教(黒住教、金光教)も、岡山、広島、山口で集中的に発生している。これらの傾向として、天照大神・天孫(すなわち皇統)信仰よりも、天之御中主神などの造化三神や国常立尊(すなわち天地開闢・宇宙創生の神々)信仰に立脚

する教団が多いため、戦前には激しい弾圧を受けている。

世襲社家の禁令は、当然、帝王神道の伝承と神祇伯の座を担ってきた白川伯王家にも適用された。この時、その伯家神道の秘法を教派神道や民間団体に伝授して再興したのも、また岡山出身の高浜清七郎と巫女たちであった。現在、全国で秘伝される伯家神事秘法は、ほとんどが岡山・吉備・山陽の伯家神道を源流に持つ。巫女禁断令を嘆く中、憑霊状態で和歌を詠む狐憑きの少女に出会った本田親徳も、清七郎から伝授された秘法をもとに巫女・少女たちの憑霊を研究し、本田神道霊学(本田霊学)を大成した。

そこで、広義の日本神道と我々IJAIの吉備の巫女たちのルーツとを整理するため、本資料を巫女たちと共同で作成することとした。方法としては、一通り日本神道の全貌を図示した上で、IJAI巫女スタッフの系譜を書き込むものである。

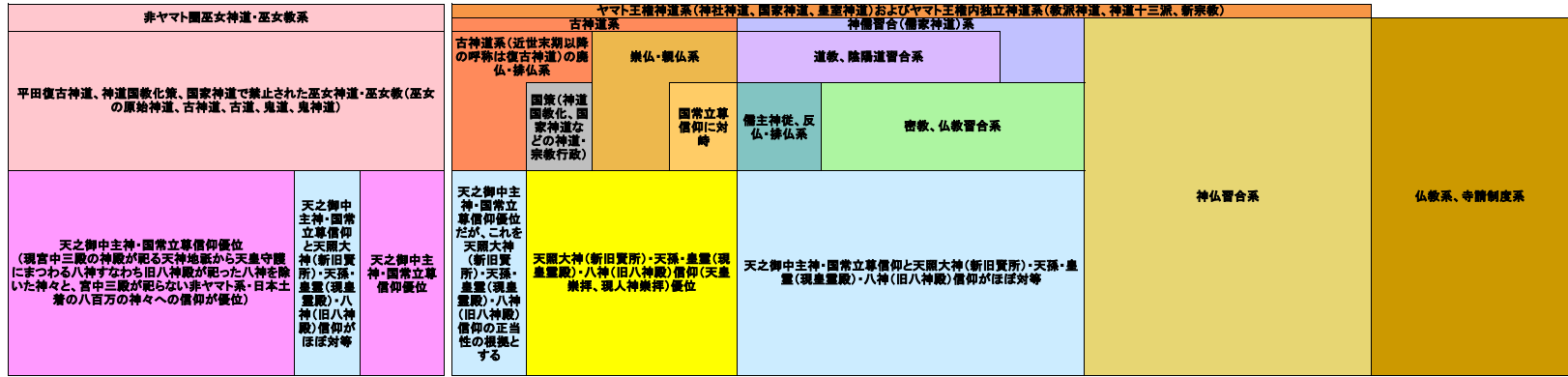
また、所長・岩崎の神道観と神道史観も、概ね本資料の通りであると理解していただいて差し支えない。基本的に私は、太古日本・東アジアのアニミズム・シャーマニズム・巫女神道、そして故郷の吉備系神道に立脚した原始神道・古神道を信奉し、ヤマト王権(現皇統)傘下の神道では(吉備によく残る)物部・斎部・大中臣神道や一部の神儒仏習合思想、さらには中観思想・唯識思想と我が家系の曹洞禅を折衷した仏教哲学を、最も好む思想とする。一方で、戦後の政府、宮内庁、文科省・文化庁、神社本庁、一部の単立法人、神道政治連盟、日本会議、大学(特に国立大学)などが神社観、神道観、天皇観、皇国史観を定義する現代の神社神道、および葬式・戒名仏教勢力が仏法を説く現代の仏教には、全く信用を置いておらず、祭祀・宗教・教学いずれの側面からも見るべきところなどないと痛感するものである。

	日本列島先占原住民、縄文人、太古弥生人(琉球民族、熊襲、隼人、アイヌ民族、出雲族、吉備族、毛野族)	非先占末期弥生人、朝鮮・百済系渡来人(天孫族、ヤマト王権連合、豪族、軍事貴族) 狭義の「大和民族」
	● 日本国民(広義の大和民族、戦前の大日本帝国の内地国民)	
建設した国家とその首長	古代筑紫、古代出雲、古代吉備など非ヤマト系古代王国(王、男王、女王)	ヤマト王権(大王)→大和朝廷(天皇・治天の君)→大日本帝国(王政復古、天皇大権・統治権編纂、立憲君主)→日本国(象徴天皇、事実上の立憲君主)
支配層の民族血統	縄文先占渡来人(先土器時代人・縄文人)と太古弥生人・渡来人(三韓・新羅系)の混血	縄文末期弥生人・渡来人(朝鮮・百済系)と左記弥生人との混血(現憲法下の選挙制確立以降は、為政者の血統不問。但し、天皇・皇族を除く。)
	広義の日本神道	
現皇統(日本国)との関係	大王(のちの天皇)と異なる王を置く王国を築いたのち、大和朝廷(現皇統)支配下に組み込まれたが、現在も異端(原始神道)として秘伝化し継承されている神道の系列 (但し、畿内も、ヤマト王権の侵入以前は巫女の王と巫女共同体による原始シャーマニズム世界。また逆に、ヤマト王権に取り込まれて中央豪族と化した吉備氏や和氣氏などは、男系神道に転向し、故郷の巫女神道と疎遠となった。)	大和朝廷(現皇統)自体の神道である、または大和朝廷(現皇統)支配下で継承されている神道の系列
父母血統と系統	女系(母系)女王・巫女系神道 :「神の道・惟神道(かんながらのみち)」「のちの神道」と「歌の道・巫女神系」(のちの歌道)とは未だ不可分	男系(父系)男王・男性神職系神道 :狭義の日本神道
祭祀の主導者(神道流派の宗匠)	筆頭巫女および巫女連合 (世襲巫女社家または地縁巫女共同体) (筆頭巫女は、女系一族の家長を兼ねる巫女、または男系男子で通れる男系一族の血統と無関係に通れる女系巫女)	男系皇族女子(内親王・女王) (必ず世襲)
祭祀の中心	神懸り神事(神人一体・シャーマニズム・神降ろし・憑依・化身型) 自ら日の巫女(卑弥呼)・シャーマンとして天の御中主神、国常立尊、天照大神、あるいはそれ以前の土着の女神となるものが真骨頂	神懸り神事(神人一体・シャーマニズム・神降ろし・憑依・化身型)
現在の日本国民に占める人口	巫女禁断令(1873)で表向きは消滅、教派神道などに強制編入 明治政府公称人数:0人、現在の実人数:およそ150人~200人 縄文系ムラ社会共同体から継続する女系女子の巫女神道・非神社神道が主体であったと考えられる。吉備の巫女神道社家では、その祭祀を秘伝化させて伝承。互いに少しづつ異なるものの、基本的には古代吉備御耶玉国系の秘宝・秘儀を保持。	日本国は少数 左記の巫女や右記の齋王が代行役が多い。
		宣明時代に消滅、戦後に形式的に復活 女人別・国力女性性までを含めると、数百人 京都・近畿の上流男系一族の才媛を斎王代とし、これを男系が担ぎ、女人別が従う祭祀を奉祭として開催し、皇族女性を伊勢祭主とすることで、形式のみを再現している。齋王代は、神懸り神事や旧派歌道を行わない。
		日本国の主流 8000万人~1億2000万人 (但し、血統はほぼ縄文・弥生混血。沖縄・北海道で縄文優勢。一方、旧石器氏族のみならず皇統および旧天孫・天神系氏族で末期弥生渡来系すなわち朝鮮・百済系優勢。) このうちほとんどの国民が明確な神道意識を持たず、同時に同程度の人口が事実上の仏教徒であると共に、仏教意識も神仏習合意識も持たず、無宗教であると自覚している。国学と現代の保守思想では、国柄/国体は万世一系・男系男子血統の大王(天武以降は天皇)が保証するものと見なされている。また、諸蕃(渡来系・朝鮮系)氏族は王権の中核を担い、皇別・神別氏族も大半が朝鮮系渡来人であった上、2001年には上皇陛下ご自身が前述の「韓国とのゆかり」を仰せられたにもかかわらず、朝鮮民族排撃の思想が見られるのが、現代日本の特徴である。

派第九道十流二流巻総目一で旧	和歌(古代歌謡~歌道)の担い手による分類	(1) 巫女神道・原始日本神道・古道歌道(縄文・弥生時代、列島先住日本人、太古の帰化渡来人)	(3) 神社神道・近代社格制度下の古代神社・古道歌道
		(2) 斎王系・後期巫女神道系歌道(末期弥生時代、朝鮮系・百済系帰化渡来人)	
		(4) 山岳信仰・修験道・仏教・神仏習合歌道	
		(5) ヤマト王権・大和朝廷・現皇統勢力圏(大王・天皇の確立期から立憲君主制・象徴天皇制の現在に至るまで)の歌道	
		第十四巻での色分け。かつ、『日本旧派歌道流派総覧』の「流派の主体」に氏族を記載	

↓↓ ほぼ上記そのまま ↓↓ 王権・歌道宗匠血統図から神道・宗教系統図へ組み替え

↓↓ 『日本神道道統図(IJAI巫女・歌道子女スタッフ加入版)』



<p>皇統以外の王統(女系巫女の王統)や神事秘法を伝承する神道の系譜である。天地開闢を担ったとされる造化三神・別天津神や神代七代への信仰を重視し、これら八百万の神々と、神々と一体化する神懸り神事を行う巫女・シャーマンら自身が神道を総有・主宰するものと見ており、天照大神直系の天孫とされるヤマトの王、すなわち天皇を「現人神」かつ神道の主宰者と見ることにしばしば懐疑的で、主に明治政府、帝国憲法下の政府から激しい弾圧や禁令を受けた。</p> <p>吉備においては、現在も巫女舞、齋庭祈禱、神剣演舞などの神懸り神事を行う女系巫女・シャーマンどうしが互いを「神」と呼ぶ一方、男系男王や男系社家については、「現人神」とされる前に吉備がヤマトに征服され、現地の豪族(吉備氏、和氣氏など)や社家が吸収されたため、現在でも吉備の王や吉備津彦神社、吉備津神社などの宮司は「現人神」とはされない。</p> <p>出雲においては、近現代まで、地域住民が出雲大社の宮司・出雲国造を現人神と崇め、国民の天皇崇拝に対峙する風習が見られたが、現在は形骸化し、むしろ宮司も住民も(天皇の「人間宣言」にもかかわらず)天皇のみを「明つ御神」と表現して神性を認める一方(「出雲国造神賀詞」の表現)、出雲大社と離れて秘儀を続ける巫女どうしが、互いに「神」と呼び合っている。</p> <p>なお、旧吉備王国・非大和朝廷系の女系巫女神道の主張には、「埴輪は吉備で発祥した」、「応神・仁徳・履中天皇は吉備の造山古墳を模倣して築造した」といったユニークなものが多いが、のちにこれらの多くが、発掘・研究調査で史実と判明している。</p>	<p>右記の同項を見よ。</p>	<p>左記の同項を見よ。</p>	<p>天地開闢を担ったとされる造化三神・別天津神や神代七代への信仰を重視するもの、天照大神直系の天孫とされるヤマトの王、すなわち天皇を「現人神」かつ神道の主宰者と見る神道の系譜である。天照大神・天孫以前の、天地開闢を担ったとされる造化三神・別天津神や神代七代の前半には、あまり言及せず傍観する一方、神代から枝分かれた各血統のうち、皇統の天孫血統としての神性・真性を強調する傾向にある。</p> <p>また、近代、とりわけ戦前・戦時中には、天皇大権、國家の統治権の総攬者としての天皇の権限の絶対性は、と見なされ、かつ「神道は宗教ではない」とされて、帝国憲法で保障されていた信教の自由を迂回する形で「國家神道」が定義され、國家國民総崇敬のファンシム、全体主義神道へと変貌した。</p> <p>戦後は一転、宗教法人神社本庁が天照大神・天孫信仰の中心を担うが、現在も神道政治連盟などの関係団体を通じて神道行政の一端を形成しており、国政や宮内庁に介入的である。また、靖國神社などの単立法人も、神社本庁とは概ね非敵対的で、天皇の靖國不参拝を批判するなど、実際は国政や宮内庁に介入的である。</p>	<p>基本的には、天照大神直系の天孫とされるヤマトの王、すなわち天皇を「現人神」かつ神道の主宰者と見なすものの、天地開闢を担ったとされる造化三神・別天津神や神代七代への信仰を重視し、しばしば天照大神・天孫信仰に反抗した神道の系譜である。従って、神代から枝分かれた各血統のうち、皇統の天孫血統の神性・真性を懐疑する立場が存在する。</p>	
---	------------------	------------------	--	--	--

原始自然信仰・シャーマニズム、アニミズム、トーテミズム、「靈(ヒ)」・「マナ」信仰、鬼道(神霊仏未分離ない霊仏公伝以前の神道)
 折口信天や中山太郎の説の通り、原始神道は全てが巫女神道・巫女教として発祥したが、巫女禁断令(1873)以降、概ね神社神道・國家神道・皇室神道・伊勢神宮および神社本庁・神道政治連盟・都道府県神社庁は否定的・批判的立場を、教派神道系教団や民俗学者らは肯定的立場をとる。

言葉・歌の側面(歌謡・歌掛き・懸け合い・囃歌・歌謡・口寄せ)と巫女神道・巫女教の側面(鬼道・呪符・神懸り神事・巫女舞・巫女神楽)が未分化である時代

<p>青銅器時代</p>	<p>吉備境丘墓文明圏</p> <p>埴輪が吉備の巫女の原始神道の祭器(特殊器台・特殊壺)として発祥(岡山、播磨境丘墓)</p>	<p>ヤマト王権連合誕生以降の動向について、本資料の協力者の巫女らの多くは、概ね以下のように見ている。岩崎も現在のところ、概ね同様の立場をとる。まず、ヤマト王権連合が吉備の巫女らを妻として、吉備の巫女神道への側面・儀装策を開始、手始めに、日本武尊が吉備の巫女らを妻とする。次いで、ヤマトは吉備の特殊器台・特殊壺を取り込み、祭器の役割を排除して「埴輪」とし、吉備の技術を模倣して遺産。</p> <p>応神・仁徳天皇が吉備に軍勢を派遣して侵攻しつつ、吉備の女を妃とし、吉備王国と吉備の巫女祭祀が急激に衰微。</p>		<p>人間を神への生贄とする風習は、太古より日本列島(縄文人、弥生人、琉球民俗、アイヌなど)や東アジア、環太平洋地域(マヤ、アステカ、インカなど)アメリカ大陸沿岸部を含む)、一部のヨーロッパ地域に見られる。(追憶伝承、三股淵伝承、見付天神禊祓と早太郎・悉平太郎伝承、丹塗矢伝承、富岡八幡宮伝承、アイヌの人身御供伝承など)</p> <p>古代ヨーロッパや西アジアでは、下層民や奴隷、土着宗教の信徒を(ローマ帝国、ユダヤ教、キリスト教などの正統性を口実として)生贄とした一方で、アニミズム文化圏である日本、東アジア、環太平洋地域では以下の特徴が見られる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆多くの人身御供の伝説と実話において、生贄となったのは女子であり、中でも確認できる限り、処女、少女、巫女、未婚女子がほとんどを占め、かつほとんどの場合でこれら全てを満たしている。一方、確認できないものの、実女であることが条件として記録されている場合も多い。 ◆人身御供の方法は、川・泉・滝などへの女子自らの入水・飛び込み・転落、祭祀の主宰者や村人らによる投げ込みである。槍・刀・剣・斧などをを用いた自害や殺害は、ほとんどの場合で人身御供として記録されていない。 ◆欧米圏のような死後の転生信仰や悪魔崇拝による赤子の殺害や(集団)自殺(人民寺院の集団自殺など)と異なり、主に男神への貢物、その荒魂(あらみたま)(の顕現である天災や疫病の流行などの鎮魂・鎮圧策として行われたものである。 ◆邪馬台国の卑弥呼の死に際して100余人の奴婢が殉葬されたこと『三国志』魏志倭人伝』に記されるなど、太古の時代には女王・女官に対する男臣の殉葬も見られ、これは東アジア、環太平洋地域、ヨーロッパに共通する特徴である。ところが、のちに東アジア、環太平洋地域では、人身御供のほとんどは前述の形態となった。地震・津波・台風など、これらの地域に特有の大規模自然災害の存在が影響したと考えられる。 ◆日本では古来、狭い国土と急峻な地形、流れの速い河川により、河川の氾濫、洪水が多発しており、また、怨霊信仰、御霊信仰、精霊信仰、妖怪信仰、人神信仰が広がるにつれ、自然災害や疫病の流行は人間の地上での悪行に対する神々(邪神や夜叉)の怒りの顕現であると信じられるようになった。それがために、ほとんどの人身御供が、上記の通り純潔女子の奉納形式となった。 ◆日本では、生贄の対象となる純潔女子(家の屋敷)には神霊から白羽の矢が立てられる(放たれる)とされるが、実際には白羽の矢が作られ、立てられた。諺「白羽の矢が立つ」(期待・囑望されて選ばれる)はこれに由来するが、本来は「犠牲者に選定される」、「神々の荒魂に目を付けられる」の意であり、かつ、「白羽の矢は純潔女子にのみ与えられた(向けられた)ものであった。 ◆なお、殉葬の代わりに土で作った人馬を陵墓に立てたのが埴輪の起源であるとする説話が『日本書紀』垂仁紀に記録されている。しかしこれは、ヤマト王権の創作にすぎないことが考古学上判明している。吉備王国(岡山県と周辺地域)の埴丘墓(埴築埴丘墓など)で巫女の祭器として特殊器台・特殊壺が発祥し、これをヤマト王権が模倣して普及させたものが埴輪であることが分かっている。一方、中国の兵馬俑は人身御供の代替であると推定されている。
<p>凡例 道統名稱 ★: 影響を受けた神道や他の宗教・思想 ◆: 特徴、概要、解説</p>	<p>古代出雲圏</p> <p>古代吉備圏(岡山、広島、山口、兵庫)</p> <p>古代畿内→古代ヤマト圏(奈良、京都)</p>		<p>原野、崇り(タマリ=立ち有り)・神々の顕現)信仰</p> <p>人身御供(ヒとみこころ)、人身供犠、生贄、人柱</p>	
	<p>吉備系巫女神道・巫女舞歌道</p> <p>吉備・岡山県の多くの女系巫女神道家は、家室や秘伝・秘儀に基づき、以下を主張 →ヤマトの埴輪、ヤマトの神々(天孫)の神代、人柱、人柱、人柱。</p>		<p>本来、「崇り」とは「神々の立ち有り」、すなわち神々の顕現の意で、この頃はこれらへの忌避と抵抗よりも畏怖と崇敬が優勢であり、神々の生贄として甘愛されている。これを神懸り神事や言葉(「言懸り行」)によって統御できる唯一の存在が巫女</p>	

墳丘墓・古墳時代

出雲系巫女神道・巫女舞歌道

阿智・阿新・神代(こうじり)・矢神・雨降山・鯉ヶ窪・流寇系巫女神道・巫女舞歌道

標榜墳丘墓流寇系神道(広義)には、温羅伝説、吉備津彦伝説、純太郎伝説などを含む、またはこれらの祖霊)

則ち山口県内(特に一帯・鹿中天皇陵など)、ヤマトの神社の原型、ヤマトの書簡(大和書簡・日本書簡)の原型、ヤマトの土器製塩、ヤマトの鉄産業は、いずれも吉備が発祥地・源流である。(「特殊融合・特殊壺」造山古墳、原始神社の「総社」、古代吉備語、古代吉備歌謡・巫女神楽など。)

→ 近年の発掘調査により、多くは史実であることが判明している。吉備とヤマトの相関図を見よ。

次にヤマト王権連合は、当時全国最大の吉備の造山古墳の造営技術を取り込んで、皆御崩山古墳(伝応神天皇陵)、大仙陵古墳(伝仁徳天皇陵)を造営。上石津ミサンザイ古墳(伝鹿中天皇陵)なども同様と考えられる。

ヤマトは、王国・墳丘規模で吉備王国と立場が逆転。巨大な前方後円墳文化を我が物とする。

さらに雄略天皇が軍勢を拡大して吉備に侵攻し、吉備氏の乱を鎮圧しつつ、吉備の女を妃とし、吉備王国の領域が決定的となる。

東アジア各地から仏教私伝(伝来時点で各地の土着信仰や儒教、道教と習合している。)

中国・朝鮮から儒教私伝

中国・朝鮮から道教、陰陽思想、五行思想私伝

中国・朝鮮から道教、陰陽思想、五行思想私伝

中国・朝鮮から道教、陰陽思想、五行思想私伝

東アジア各地から仏教私伝(伝来時点で各地の土着信仰や儒教、道教と習合している。)

東アジア各地から仏教私伝(伝来時点で各地の土着信仰や儒教、道教と習合している。)

東アジア各地から仏教私伝(伝来時点で各地の土着信仰や儒教、道教と習合している。)

東アジア各地から仏教私伝(伝来時点で各地の土着信仰や儒教、道教と習合している。)

太古女系王権の神道・言語文化(邪馬台国・九州説、出雲説、吉備説、畿内説など)

吉備墳丘墓・古墳、吉備鏡鉄(吉備たたら鏡鉄)文明圏

畿内(非ヤマト系)墳丘墓文明圏

毛野墳丘墓・古墳文明圏

女系巫女神道家の巫女(御子、神子)★縄文型原始神道祭祀

総社、倉敷、高梁、瀬戸内、備前の女系社家、巫女(御子、神子)★縄文・弥生混合型原始神道祭祀

下記三氏族は、いずれも神別天神系祭祀氏族(すなわち、天孫・神武天皇・ヤマト王権が大和の地に入る以前から列島に土着した祭祀氏族)であり、吉備王国・西日本や大和の各地で祭祀を司った。

忌部神道の拠点は岡山県備前市伊部など

芥子山磐座流(太多羅羅言、匂句籠神社、布籠神社、鹿)巫女舞歌道

姫社(ひめこそ)系巫女神道・巫女舞歌道

物部氏・島部(青部)氏・(大)中臣氏(鏡氏、神別天神氏族・非皇別氏族)系祭祀(女系巫女神道)

卑弥呼(女王兼兼頭巫女)★朝鮮・渡来系祭祀★→ 神武東征神話

邪馬台国(太古女系王権の一)の神道・言語文化

しかし、吉備の巫女らの中には、下記の説を唱える者が多くいる。また近年、これらの説を唱える吉備研究者も増加している。岩崎も、一部の説の正しさを確信している。

すなわち、埴輪は吉備で発祥したとする説(ただし、巫女神道の祭具として発祥したのであるから「埴輪」とは別に特称されるべきであるとする説)、邪馬台国が吉備にあったとする説(邪馬台国こそ吉備国の本体であるとする説、卑弥呼らの鬼道は吉備・備前・備中・備前・備後地域の巫女祭祀そのものであるとする説)、造山古墳こそ神天皇陵であるとする説(その他吉備の古墳群をのちのヤマト王権の天皇や有力者や神・仁徳・雄略天皇(後の五三)らこそ吉備人であり、従って吉備に侵攻したのは、内紛や種間で非敵対的な五位・地位尊卑によって一旦吉備の王や有力者となったのちに吉備が大和でヤマト王権(日本)を作った(そのために吉備国が消えたように見えるにすぎない)とする説、「起経」にヤマトの起源が吉備にあることを嫌悪し願ったという後代の(大和・畿内)に定着した天皇・有力者による書であるとする説などである。

少なくとも造山古墳・神天皇陵説の正しさは、半数超の吉備研究者と吉備の巫女が確信している状況にある。また、埴輪の起源の問題については、吉備のものが最古であることが備前・備中などの発掘調査で確認され、これは「特殊融合・特殊壺」と特称されるに至った。現在のところ、政府、文部省、文化庁、宮内庁、神社

東アジア各地から仏教私伝(伝来時点で各地の土着信仰や儒教と習合している。)

中国・朝鮮から儒教私伝

中国・朝鮮から道教、陰陽思想、五行思想私伝

中国・朝鮮から道教、陰陽思想、五行思想私伝

中国・朝鮮から道教、陰陽思想、五行思想私伝

東アジア各地から仏教私伝(伝来時点で各地の土着信仰や儒教と習合している。)

東アジア各地から仏教私伝(伝来時点で各地の土着信仰や儒教と習合している。)

東アジア各地から仏教私伝(伝来時点で各地の土着信仰や儒教と習合している。)

東アジア各地から仏教私伝(伝来時点で各地の土着信仰や儒教と習合している。)

神儒習合(近世以降の呼称は儒家神道)の発生

怨霊・呪いの(ろい・まじない)信仰

荒魂(あらみたま)・和魂(にきみたま)・幸魂(さちみたま)・奇魂(くしみたま)信仰(大國主神・大物主・大神信仰、出雲大社の神座・鳴鯛(となえことば)など)

◆最初は怨霊信仰を受けて荒魂信仰として始まり、次に和魂が信仰され、その和魂から幸魂と奇魂が分かれたとされる。しかし、荒魂信仰が和魂信仰に転じる傾向は、御坐信仰の発生以降である。また、幸魂と奇魂の峻別は、近代以降の出雲大社(教)や大神神社の霊魂観である。太古神道にこの傾向はなく、実際には二魂(荒魂・和魂)並列や四魂並列(全魂一体)の信仰であった。従って、怨霊と靈験とは同質のものとして理解されていた。

しかし、後世の朱子学系・幕藩体制派の儒家神道や復古神道、明治以降の国家神道は、全国の神社・神官や庶民への勧善懲惡の論法として非並列の四魂論を唱えた。出雲大社・大神神社も、祭神論争の敗北の反動で、大國主神の荒魂・和魂の両極を伊勢神宮に対して強調する二元論的霊魂観に移行した。また本田聖も、下述の通り、新規の一霊四魂を唱えた。出雲と吉備の巫女神道は、これらいずれもに異を唱え、一元論的霊魂観を伝承した。

神仏習合の発生(神仏習合系祭祀)

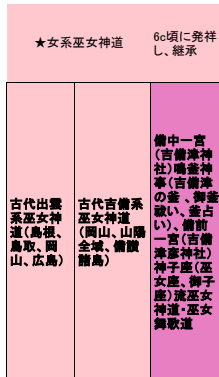
◆仏教私伝においては、公伝後における朝廷での神仏習合の体系化や神宮寺の建立は見られず。仏や菩薩を単に「善神(あだしくにのみ、となりのくのみ)」、「今来(いまき)の神」、「仏神」とし、それまでの古神道の八百万の神々と同質と見て、これらに追加する形をとった。仏教を神道と異なるものとする理解はせず、古来の神祇への仏や菩薩の追加のみに焦点が置かれ、全てを神祇として相変わらず巫女が祀つたため、正しくは「仏・菩薩私伝」とすべきである。従って正確には、初期の神仏習合は、相異なり矛盾する信仰の混合を意味する「シンクレティズム」とさえ言えない。

山岳信仰

飛鳥時代	見出せない非ヤマト王権系	吉備の巫女と琉球のシャーマン	岸本流流巫女神道・巫女興教道	吉備大宰を設置、監視ヤマトが吉備の男系氏族(吉備氏、和氣氏など)を朝廷中枢に取り込む。吉備に屯倉(みやけ)制や郡氏(べのみ)制を真っ先に敷き、畿内ほか全国に適用できるかを実験。屯倉・三宅・宮家・宮宅(みやけ)の苗字が岡山県に集中的に残るのはこのため。	太宰府を設置、監視	物部神道	蘇我氏(崇仏、皇別氏族)系仏教祭祀 ◆朝廷祭祀は仏教中心に。	◆崇仏派の皇別氏族・蘇我氏の台頭で、物部・忌部・中臣三氏の神道祭祀は朝廷中枢から離れ、朝廷にとって二義的なものとなる。	陰陽五行説	神仏習合の体系化(大和朝廷主導のシンクレティズム)	八幡信仰、龍野信仰、日吉信仰	◆仏教公伝により、仏教が神道とは異なる宗教体系であることが明らかとなり、崇仏・廣仏論争が起きるも、崇仏派の蘇我氏が勝利、朝廷の仏教化が加速した。神道よりも仏教が重視され、朝廷の仏教の主導で多数の神宮寺が建立された。次第に、雑多な神仏混濁は整理され、密教や修験道において、神仏不可分のものとして習合した。この頃より、神仏習合はシンクレティズム(相異なり矛盾する信仰の混合)として理解されるようになった。	南都六宗(奈良仏教) :宗派ではなく、相互に垣根の低い学派であり、一堂に会して教理研究を行った。
奈良時代	筑紫・出雲・吉備が滅亡	毛野が滅亡	忌部(齋部)神道	◆「物部鎮魂呪法」の原初の姿は、宮中に「祝部(はふりべ)殿の御法」として入り、しばらく続いた。だが、廣弘の姿勢を貫徹したため、朝廷から排除、多くの祭祀は秘儀化して吉備・山陽に流入して相伝され、一部が和学教授所の「十種神寶御法」や教派神道系教団、巫女の秘儀に残る。	◆「天皇」「日本」の概念が確立	(大)中臣神道	◆天照大神信仰 ◆天武天皇の代に君子の号を「大王」から「天皇」へ、多くの天皇自身が神道祭祀は疎遠で、あくまでも仏教を重視した。	◆天武天皇の代に君子の号を「大王」から「天皇」へ、多くの天皇自身が神道祭祀は疎遠で、あくまでも仏教を重視した。	◆天武天皇の代に君子の号を「大王」から「天皇」へ、多くの天皇自身が神道祭祀は疎遠で、あくまでも仏教を重視した。	◆天武天皇の代に君子の号を「大王」から「天皇」へ、多くの天皇自身が神道祭祀は疎遠で、あくまでも仏教を重視した。	◆天武天皇の代に君子の号を「大王」から「天皇」へ、多くの天皇自身が神道祭祀は疎遠で、あくまでも仏教を重視した。	◆天武天皇の代に君子の号を「大王」から「天皇」へ、多くの天皇自身が神道祭祀は疎遠で、あくまでも仏教を重視した。	◆天武天皇の代に君子の号を「大王」から「天皇」へ、多くの天皇自身が神道祭祀は疎遠で、あくまでも仏教を重視した。
平安時代	古代出雲系巫女神道(高根、鳥取、岡山、広島)	古代吉備系巫女神道(岡山、山陽全域、備前備後)	◆(大)中臣氏優勢のまま齋部氏振るわず、秘儀化して吉備・山陽に流入、教派神道系教団の一部が残る。(岡山県備前市伊部)	◆(大)中臣氏優勢のまま齋部氏振るわず、秘儀化して吉備・山陽に流入、教派神道系教団の一部が残る。(岡山県備前市伊部)	◆(大)中臣氏優勢のまま齋部氏振るわず、秘儀化して吉備・山陽に流入、教派神道系教団の一部が残る。(岡山県備前市伊部)	◆(大)中臣氏優勢のまま齋部氏振るわず、秘儀化して吉備・山陽に流入、教派神道系教団の一部が残る。(岡山県備前市伊部)	◆(大)中臣氏優勢のまま齋部氏振るわず、秘儀化して吉備・山陽に流入、教派神道系教団の一部が残る。(岡山県備前市伊部)	◆(大)中臣氏優勢のまま齋部氏振るわず、秘儀化して吉備・山陽に流入、教派神道系教団の一部が残る。(岡山県備前市伊部)	◆(大)中臣氏優勢のまま齋部氏振るわず、秘儀化して吉備・山陽に流入、教派神道系教団の一部が残る。(岡山県備前市伊部)	◆(大)中臣氏優勢のまま齋部氏振るわず、秘儀化して吉備・山陽に流入、教派神道系教団の一部が残る。(岡山県備前市伊部)	◆(大)中臣氏優勢のまま齋部氏振るわず、秘儀化して吉備・山陽に流入、教派神道系教団の一部が残る。(岡山県備前市伊部)	◆(大)中臣氏優勢のまま齋部氏振るわず、秘儀化して吉備・山陽に流入、教派神道系教団の一部が残る。(岡山県備前市伊部)	
													◆(大)中臣氏優勢のまま齋部氏振るわず、秘儀化して吉備・山陽に流入、教派神道系教団の一部が残る。(岡山県備前市伊部)

<p>★女系巫女神道</p>	<p>◆出雲の巫女神道とは異なる、大社社家による男系神道、神語「幸魂奇魂守給幸給」、舞詞「出雲国造神賀詞」(天皇を現人神とし、「明つ御神」と表現。奈良から平安初期に15回。)</p>	<p>◆出雲の巫女神道とは異なる、大社社家による男系神道、神語「幸魂奇魂守給幸給」、舞詞「出雲国造神賀詞」(天皇を現人神とし、「明つ御神」と表現。奈良から平安初期に15回。)</p>	<p>◆出雲の巫女神道とは異なる、大社社家による男系神道、神語「幸魂奇魂守給幸給」、舞詞「出雲国造神賀詞」(天皇を現人神とし、「明つ御神」と表現。奈良から平安初期に15回。)</p>	<p>◆出雲の巫女神道とは異なる、大社社家による男系神道、神語「幸魂奇魂守給幸給」、舞詞「出雲国造神賀詞」(天皇を現人神とし、「明つ御神」と表現。奈良から平安初期に15回。)</p>	<p>の神勅を賜った天児屋命伝の「神事系源」が、中臣鎌足を経て大中臣・卜部氏(天児屋命が氏祖とされる)、山陰家に伝ったものとされる。「山陰」は「王の蔭(となつて王を支える)」の意か。古神道が国家神道、すなわち北朝系神道に統合された近代、これに反発して神道霊学化、さらに心霊科学化し、大日本皇道立教会の南朝正統論急進派として活躍。修行の中心地は近代まで吉備・岡山。従って、物部・斎部神道と同様、起源と太古の本拠は吉備の地か。また、元はヤマト王権・天皇に対抗して吉備の王を支えた神道か。以下、後述。</p>	<p>★賀茂神社、卜定、大祓、呪術、陰陽道 ◆卜定により賀茂神社に巫女として奉仕した未婚の内親王・女王。確立は嵯峨朝。承久の乱後に断絶。現代の斎王代はその再興の試みであるが、選ばれた良家の子女は神道・歌道の知識や純潔性、神慮り体質を要しない点で、古代斎院や吉備の秘儀と異なる。この他、『旧派歌道総覧』で詳説。</p>	<p>★陰陽五行説に道教の天体、神信仰やインド占星術が留合したものの。 ◆主に賀茂氏が吸収し、忠行・保憲父子から光榮へと伝授される。</p>	<p>神備習合(近世以降の呼称は體家神道)の体系化</p>	<p>精霊信仰、龍魁魁廟・妖怪信仰</p>	<p>空海が開宗。 ★三論宗</p>	<p>最澄が伝教。</p>	<p>◆観相念仏</p>
<p>宮備王國西端(山口)</p>	<p>↓杵築大社(出雲大社)の建設(4c~7c)以前に発祥し、継承</p>	<p>↓墳丘墓時代(2~3c)以前に発祥し、継承</p>	<p>↓墳丘墓時代(2~3c)以前に発祥し、継承</p>	<p>↓墳丘墓時代(2~3c)以前に発祥し、継承</p>	<p>朝儀は「典札」・「儀式」と称され、美態としても(仏教・儒教・陰陽道の)儀式であり、(神道)の祭祀ではなくなった。神道は、各神道宗家が担うものとなった。</p>	<p>陰陽師の賀茂忠行・保憲父子が陰陽道、天文道、曆道の全てを究め、三道の分類が解消され、三道全てを司る陰陽家・賀茂氏の地位を確立した。但し、弟子のうち、安倍晴明に主に天文道を、保憲の子・光榮に主に曆道・宿禰道を伝えたため、陰陽道宗家は天文道寄りの安倍氏と曆道・宿禰道寄りの賀茂氏に二分した。陰陽諸道のうち、最も難解とされたのは天文道で、その達人を出した安倍氏がいよいよ優勢となり、安倍氏が陰陽頭を、賀茂氏が陰陽助を世襲した。なお、吉備の一部の巫女らは、賀茂一族も安倍晴明も吉備真備の子孫であり、本来吉備國が生み出した陰陽道を朝廷が我が物として取り込んだと主張する。岩崎も概ねこの立場をとる。</p>	<p>陰陽師の賀茂忠行・保憲父子が陰陽道、天文道、曆道の全てを究め、三道の分類が解消され、三道全てを司る陰陽家・賀茂氏の地位を確立した。但し、弟子のうち、安倍晴明に主に天文道を、保憲の子・光榮に主に曆道・宿禰道を伝えたため、陰陽道宗家は天文道寄りの安倍氏と曆道・宿禰道寄りの賀茂氏に二分した。陰陽諸道のうち、最も難解とされたのは天文道で、その達人を出した安倍氏がいよいよ優勢となり、安倍氏が陰陽頭を、賀茂氏が陰陽助を世襲した。なお、吉備の一部の巫女らは、賀茂一族も安倍晴明も吉備真備の子孫であり、本来吉備國が生み出した陰陽道を朝廷が我が物として取り込んだと主張する。岩崎も概ねこの立場をとる。</p>	<p>反本地垂迹説(神本仏迹説)</p>	<p>物忌み・方違え信仰 ★道教、陰陽道の影響</p>	<p>両部神道(兩部習合神道)</p>	<p>山王神道</p>	<p>◆称名念仏</p>
<p>二所山田神社宮司宮本家・巫女、うち女子道社員・近隣の主婦・女子</p>	<p>吉備系巫女神道・巫女舞歌道</p>	<p>吉備や土佐へ再流入し、土着の巫女神道と習合</p>	<p>物部神道</p>	<p>伯耆神道(白川神道)</p>	<p>花山天皇が延信王を神祇伯に任命。 ◆神祇伯世襲社家(13c以降、白川伯王家・白川王家の王号)、口伝による宮中祭祀継承、頭懸両斎のうちの幽斎神事、審神(吉に)わ、神事、祝(はふり)の神事</p>	<p>★大中臣神道が儒教・陰陽道の色を帯び、度会神道が一部継承</p>	<p>御霊信仰・御霊命・人神信仰(六所御霊・天神信仰など)</p>	<p>★真言密教、山岳信仰、修験道 ◆本地垂迹説、神仏の究極的一致(兩界曼荼羅の本地とし、日本の神々の垂迹とする)</p>	<p>★天台密教、山岳信仰、修験道 ◆本地垂迹説、三論即一思想、山王権現(白吉神社祭神の大山咋神)を釈迦の垂迹とする</p>	<p>浄土教(浄土思想、浄土信仰)</p>	<p>◆末法思想、終末論(インド原始仏教にはなく、中国・日本のみ。)</p>	<p>融通念仏宗</p>
<p>二所山田神社・女子道社員・巫女舞歌道</p>	<p>阿曾・阿新・神舞・神代(こうじろ)・矢神・雨降山・豊分靈瀧原流巫女神道・巫女舞歌道</p>	<p>吉備へ再流入し(岡山県備前市伊部など)、土着の巫女神道と習合。色久古窯跡群・備前焼(伊部焼)陶芸家にも流入。</p>	<p>斎部神道</p>	<p>斎部神道</p>	<p>(大)中臣神道</p>	<p>蘇民将来信仰・成塔神信仰・夜神信仰 (牛頭天王信仰・スサノオ信仰・新羅國信仰・靈園天神信仰・津島信仰など)</p>	<p>融通念仏宗</p>	<p>融通念仏宗</p>	<p>融通念仏宗</p>	<p>融通念仏宗</p>	<p>融通念仏宗</p>	

室町時代



いざなぎ流御折儀(いざなぎ流舞神楽)

高知県香美市物部町(旧物部村)・物部川流域を中心に、香北町、土佐山田町、香我美町に伝承される独自の神道系流派。
 ＊物部神道、吉田神道、陰陽道の影響を否定しており、陰陽師を名乗らないが、影響は明らかである。修験道、仏教
 ◆独自の祭文・御幣。地域ごとにさらに「根本屋伝(神道寄り)」、「天台流(修験道寄り)」などの語流派に分かれる。

◆神祇大副(神祇官次官)世襲世家

唯一宗源神道(元本宗源神道、唯一神道、卜部神道、吉田神道)

吉田兼俱創始。
 ＊度会神道、儒教、道教、陰陽道、仏教、密教、加持祈禱、神佛三教習合、秘伝神道、山陰神道
 ◆反本地垂迹説(神本仏迹説)、神道の汎神論。豊受大神を祀る立場からこれを天之御中主神や国常立尊と別個に同一視することどまった伊勢神道を発展させ、天之御中主神と国常立尊とを完全に同一とした。吉田家は「神祇管領長上」を名乗った。

江戶時代の儒学直系神道(狭義の儒家神道)による儒学(ほぼ全て朱子学)の体系化

初的神佛分離策(岡山藩)

水戸藩、淀藩、会津藩がこれに続く。

三輪神道 天台神道(日吉神道) 法華神道

★仏教的神道、神仏習合
 ◆山王神道にほぼ一変神道を同一だが、主とする近世山王神道の名称。幕府の東照宮祭祀を支配し、神仏習合を排する寺社奉行神道方の吉川家に対峙。
 ＊法華宗、のち日蓮宗 ◆本地垂迹説

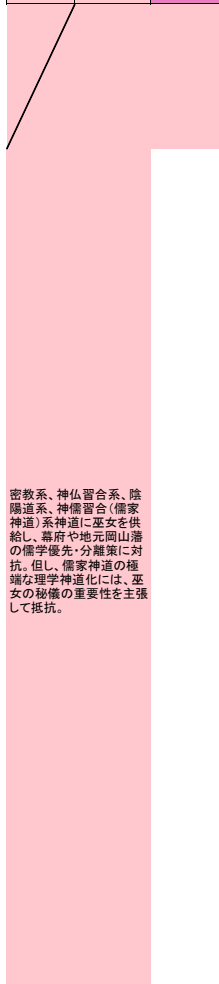
他宗旨に阿諛して布施を受ける日蓮宗の変質に対し、日親とその一派が日蓮の教えである不受不施義と法華経原典への回帰を主張するも、容れられず。豊臣秀吉による方広寺大仏殿千僧供養会を機に受布施派と不受不施派(日奥が継承)の分岐が決定的に。

1549 キリスト教の公伝(イエズス会)

1612、キリスト教禁止令

安土・桃山時代

江戸時代



思想の源流は度会家行や清原宣實。主流は林羅山に始まる儒主神従の林家神道。山鹿素行、熊沢春山、藤田東湖は神主儒従、荻生徂徠(本姓は物部氏)は神道色が希薄。
 ＊儒学・儒教、とりわけ朱子学
 ◆神儒一致、儒主神従、反仏・排仏、反神仏習合、反神仏明学、徳川幕藩体制正当化、釈奠の復興。吉田神道の秘儀的傾向を非難しつつ自身が秘伝化。

吉川惟足創始。
 ＊吉田神道、国常立尊信仰、儒教、朱子学、宋学、官学
 ◆神道＝教学・君臣の道、神儒一致、吉田神道の神佛習合要素排除、儒学・宋学重視、行法神道に対する理学神道の真性を主張、神人合一説。保科正之が庇護し、吉川家は幕府寺社奉行神道方を世襲。神仏習合の天台神道・東照宮祭祀に押され、近世武家社会の中心とはならず。

天道理想

★仏教、儒教、道教、神仏習合、儒家神道
 ◆神仏習合、特に仏教を基盤とするが、神儒一致思想、かつ一神教的・天命論的な「天命」「天命」信仰で、善及は儒教道徳の浸透による。中国の神林の儒道三教一致思想の道教部分が、日本では神道に置き換わった。お天道様(おてんとさま)の起源。

聖伝神道(寛城神道) 山王一実神道

★真言密従、仏主儒従
 ◆赤心・君臣の大義を神道の奥義とし、夫婦・朋友の道を説く儒教を下位に置き、神祇灌頂
 ＊山王神道、天台神道、日吉神道、度会神道
 ◆天海が主唱、徳川家康が庇護、東照大権現(家康の勅諭号)

日蓮本宗、日蓮正宗、法華宗などほぼ全ての法華系宗旨
 ＊法華宗の布施を受け、供養も施す。
 岡山県に集中的に発生
 ＊法華宗・日蓮原理主義(日蓮自身は不受不施義を主張)。

江戶幕府および受布施派は、不受不施派を「邪宗門」として弾圧。不受不施派は岡山に偏って隆盛したため、岡山藩初代藩主・池田光取以降、歴代藩主が弾圧を実行。

1599 家康と受布施派が親書の受布施派・日親を大坂城へ送り込み、不受不施派の妙覚寺・日奥に論争を仕掛け、日奥が対馬に流罪となる。(大阪対論)

1608 家康、浄土宗、受布施派が親書・親受布施派の浄土宗・龍山を江戸城へ送り込み、不受不施派の妙覚寺・日親に論争を仕掛け、日親が心喪失で事実上敗北。

1609 日親が京都六条河原での拷問・身体刑により耳や鼻を失う。さらに、四肢麻痺、言語不能の瀬の重傷にさせられた説あり。(慶長宗論、慶長法難)

1630 幕府と受布施派の久遠寺が親書の受布施派・日蓮らを送り込み、不受不施派の池上本門寺・日樹らに論争を仕掛け、日樹は信濃国伊那郡飯田に流罪となり、日樹を支持しつつ亡くなった日奥は遺言が対馬に流罪となる。(身池対論)

1665 幕府と受布施派が不受不施派に「敬田供養」の弾圧。

不受不施強硬派が岡山県(とりわけ備前国・備中国)で拡大。上記弾圧により、他地域で隠れ不受不施派(裏向きのみ他宗旨に改宗した「内信」となっていた信徒らも主に岡山に逃亡、合流、潜伏。「内信」から強硬派に再び転ずる僧侶・信徒も増加。

1595 受布施派 1595 不受不施派

1612、キリスト教禁止令

儒家神道、陰陽道のみならず、伯家神事秘法など、既存の王道神道の秘儀秘伝部分が吉備に流入し、巫女が良く継承。太古神道を母体とした神霊学的巫女神道の形成が進む。神懸り神事では、天之御中主神・国常立尊信仰との霊的一致を重視し、伊勢内宮神道にも幕藩の儒学にも異を唱えた。

国常立尊信仰

古神道復興を目指す国学者と日本の漢方医により、古医道が唱えられる。「医」の正字体「醫」や「醫」は、巫女が神懸って神託を得（神人一体化）、その託宣・呪術や自然薬によって病を治癒・寛解させた太古医術全般を指す。但し、江戸に生じた復古主義としての「古医道」は、伯家神道から興った。

江戸中期以降は、伯王の世襲は形式的・儀礼的なものと化し、伯家神道の秘儀奥義を体得しているのは、初代学頭・臼井雅胤をはじめとする学頭であったという状況となった。

荷田春満、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤ら
★『古事記』を中心とする『日記』・日本神話の研究、『万葉集』・『古今集』を中心とする和歌の研究

水戸学

荷田春満から秘蔵本『福荷古伝』を伝授された荷田訓之が源流。これを更に山口志道が受け継ぎ、呼吸法を取り入れた言霊学を創始し、望月幸智らに伝授。
★福荷古伝、国語・呼吸法
◆『言堂学』の語の確立は、修験道言堂学の山本秀道を待たねばならないが、言堂学と呼べるものは事実に復し、山本秀道に誕生、山口志道は、神威伯・白川資敬王に神代学を指南する一方、伯家神事を学んだ。

鳥伝神道(賀茂神道)

橋以貞の弟子で、正親町公通に垂加・正親町神道を学んだ玉木正英が創始。
★垂加神道、正親町神道、京都福宮の神官橋氏の家伝
◆神儒習合、理学神道(教法的)に對し行法神道を重視、禊祓・鳴弦・墓目などの秘儀秘伝を有し、「橋家〇〇伝」と称する。橋氏自身の手による創始ではなかったが、これを継いだ長瀬真幸・和歌の門人、和田殿足は、旧姓は弓削、本姓は橋氏の出で、ここで名目上、「橋家の神道」となる。

幕末三大新宗教(いずれも新儒宗教)

高松八品講

古語(仮)道(皇朝神道)	伯家神道(白川神道)	吉田神道	山崎間斎創始。 ★度会神道、朱子学 ◆単に間斎の学を、またはその朱子学の側面を協調した場合を、崎門(神)学や間斎学という。湯武放伐・易姓革命否定など、思想の骨格は垂加神道そのものである。門人(崎門学派)に正親町公通、土御門泰福、流川春海、帆足長秋ら。	崎門学(崎門神学、間斎学)	垂加神道(靈社(しです)神道、山崎神道)	山崎間斎創始。 ★度会神道、大中臣神道、吉田神道、吉川神道、国常立尊信仰、朱子学、陰陽道、易学、臨濟宗、神儒仏三教習合(但し、神儒融合を優先する一方、自らの領内の神社・寺院の整理では神仏習合を排除) ◆神道=天皇統治の道、尊皇、神儒一致、天人唯一(天道即人道)の理、生祀、湯武放伐・易姓革命否定、吉川神道勢力をほぼ吸収。	正親町神道	土御門神道(或信神道、安家神道、天敵神道)	橋家神道(橋神道)	一部の東国(上総国、下総国、安房国など)の歌派(「悲田派」や「恩田派」)が、郷土・権閥に耐えかねて幕府・奥布施派に妥協。一方の備前・備中では、不受不施強硬派を維持。	寺請制度(キリストンや不受不施派でないこと、禮儀様であることの証明)	1665 不受不施派・日講が「守正護国章」呈上。 1665 不受不施派禁止令 1666 日講、日向に流罪 1669 不受不施派寺請禁止令	寺請制度	キリスト教禁令の強化
			伯家神道との対立続く。	国学(古学・古遺学・和学・皇朝学)	言堂(げんれい)学	山崎間斎の門人の正親町公通が祖。 ★垂加神道 ◆堂上家の正親町家を朝廷に普及させ、有職故実を加えてこの名となった。	山崎間斎の門人の土御門泰福が祖。 ★垂加神道、度会神道、陰陽道、天文学、理学 ◆陰陽道の安伝を有し、「橋家〇〇伝」と称する。橋氏自身の手による創始ではなかったが、これを継いだ長瀬真幸・和歌の門人、和田殿足は、旧姓は弓削、本姓は橋氏の出で、ここで名目上、「橋家の神道」となる。	1882 岡山不受不施日指派(導師派) →1689 日蓮宗不受不施派	1682 岡山不受不施津津寺派(不導師派) →1689 不受不施日蓮宗門派	1691 幕府が悲田派に對し、受布施派・天台宗への改宗命令を發布(派内にお隠れ不受不施派がいたため、一派全体を隠れ不受不施派と見なして弾圧し、関係者を流罪に。)	1691 幕府が悲田派に對し、受布施派・天台宗への改宗命令を發布(派内にお隠れ不受不施派がいたため、一派全体を隠れ不受不施派と見なして弾圧し、関係者を流罪に。)	備前・備中の不受不施強硬派を中心に、強硬派(他宗旨の寺請自体を拒否する僧侶の「法中」、地方僧侶の「法燈」、信徒の「法立」)が、主に法立を通して歌派・隠れ不受不施派(表向きではあるが、他宗旨の寺請となり、満足に不受不施派に近づけない信徒である「内信」)を仲介・援護する地下組織(「導師」制度)が確立。しかし、岡山の最強硬派は、幕府・他宗旨への妥協なき法立(清)が仏法を捨てた内信(濁)の導師となっているとして、双方の立場を批判し、岡山で不受不施派が二派に分裂。全国の不受不施派信徒に波及。	臨濟正宗興業派 → 興業宗	福建省より来日した臨元隆が創始。 ★臨濟宗や修行形態は日本臨濟宗に準じながら、中国神の正統を重んじながら、中国神の正統の開祖ともされる。
神道靈学(御教神道、神祕学神道、隱秘学神道、神智学神道、神祕主義神道、神靈神道、心靈神道)	伯家神事秘法	復古神道(古神道、古遺学)												

<p>明治政府が巫女、陰陽師、修験者への弾圧を開始。吉備の巫女神道家の一部は陰陽師や修験者と結託し、天之御中主神・国常立尊信仰に基づく反皇統・反国家の霊的神道結社を組織して、皇統・国家に対する祭り・呪い(霊的防衛)の秘儀を実施するようになる。当初は独自の秘法であったが、やがて男系男子創唱の神道霊学・本田霊学とも、立場上および思想上、当然結託し、反神道国教化・反国家神道の素地を形成した。神道霊学側も、畿内や吉備、出雲の巫女らの憑依現象を観察・研究した。しかしながら、本田霊学の根幹である一霊四魂(中心霊の直霊(なおい)が荒魂・和魂・幸魂・奇魂を統御しているとする)、および四魂の機能とされる勇親愛智の思想については、巫女らは早くから極めて懐疑的で、実際に古神道には、このような一霊中央集権的・四魂分業的な霊魂観は存在していない。二魂(荒魂・和魂)並列や四魂並列の信仰は古来あるものの、直霊については、巫女らは古神道の「霊(心)」や太平洋島嶼地域の「マナ」とも異なる朱子学的・一神教的神道解釈だとしている。最終的には、巫女神道の神道霊学と狭義の神道霊学とは、袂を分かつこととなった。</p>	<p>伯家神事復興運動を開始した高浜清七郎が本田親徳と交流、親徳に伯家幽斎神事秘法を伝授。次いで親徳が、神霊学者・月見里福荷神社宮司の長沢雄福らに霊学と伯家神事秘法を伝授。</p>	<p>1871 近代社格制度制定 1871 神社を「国家の宗祀」と定義(太政官布告)のちの「神社非宗教論」と国家神道創設の礎となる。 1871 神道の中央集権化に伴う世襲神職の廃止と補填補任(太政官布告) 1871 神祇官の神祇舎への降格による祭政一致強化(事実上の昇格だが、迷走)</p>	<p>神職世襲廃止により、白川家でも、この年に生まれた資長は神祇大副・伯王でなくなる。(のち和学教授所総監として伯家神道を継承。資訓は1884年に子爵に。) 神職世襲制廃止により吉田家の神祇大副世襲が終焉</p>	<p>伊勢神宮少宮司の浦田長民が設立 ★伊勢神宮内宮、伊勢信仰(伊勢講)、神社崇敬・神社神道系</p>	<p>千家幸福が整備・再興 ★古代出雲系、出雲大社崇敬、出雲巫女神道の影響(但し、出雲教は神道大教系)、神社崇敬・神社神道系</p>	<p>★伯家神道系 ◆但し、伯家神道の最深奥義たる第一種相伝は行われず。</p>	<p>★大中臣神道、古代吉備系、吉備巫女神道・シャーマニズムの影響、親伊勢神宮</p>	<p>★儒家神道系</p>	<p>明治政府の弾圧への対策のため、神道的教義を整備</p>	<p>明治政府の弾圧への対策のため、神道的教義を整備</p>	<p>山みき自身は、あくまでもシャーマンであり、教団化を望まず。現教団の現義のいずれをも唱えていない。教団は、のちに自ら非神道を公表し、教派神道連合会を脱退を申し出、『宗教年鑑』でも諸教分類となる。</p>	<p>山本秀道宅で学んだ弟子の大石凝真美が天津金木学、日本言霊学を大成。山口志道、中村孝道、祖父の望月幸智の言霊学をも取り入れる。 ★古神道、言霊学、修験道、伊勢外宮神道(神勢・御魂代) ◆加神祈禱、太占、神人合一、『古事記』と『法華経』の密合。 言霊学は、神道を基盤に、修験道や陰陽道の影響を受けて発展し、大石凝真美に直接学んだ出口玄任(三郎)や山藤弘道、水谷清、水野清年、朝倉尚綱らが継承したが、結局のところ、当時最も言霊学に心酔したのは明治天皇と昭憲皇太后である。逸話では、皇太后が一鏡寮からもちらした城入り道具の中に、和歌三十一文字を作る心得を書いた古書があり、その中に五十音言霊・布斗麻邇の記述があった。天皇が、宮中三殿賢所にある『古事記』神話文書の中の五十音言霊との関連に気づいた。そこで、皇太后付の書道家だった弘道が、大石凝の言霊学を天皇・皇太后に紹介し、研究の相手をしたというものである。引き続き、後述。</p>	<p>不受不施派において、「法立」と「内儀」の区別が消失したにもかかわらず、導師派と不導師派の対立は解消されず。</p>
<p>吉備巫女神道による秘教神道結社 伯家神事秘法 神道霊学(秘教神道、神祕学神道、隠秘学神道、神智学神道、神道霊学神道、心霊神道)</p>	<p>1872 神祇省・官教使廃止、教部省設置、三条教則(三條教憲)発布、大教院設置 1873 巫女禁断令(教部省達)</p>	<p>1872 神祇省・官教使廃止、教部省設置、三条教則(三條教憲)発布、大教院設置 1873 巫女禁断令(教部省達)</p>	<p>1872 神祇省・官教使廃止、教部省設置、三条教則(三條教憲)発布、大教院設置 1873 巫女禁断令(教部省達)</p>	<p>1872 神祇省・官教使廃止、教部省設置、三条教則(三條教憲)発布、大教院設置 1873 巫女禁断令(教部省達)</p>	<p>1872 神祇省・官教使廃止、教部省設置、三条教則(三條教憲)発布、大教院設置 1873 巫女禁断令(教部省達)</p>	<p>1872 神祇省・官教使廃止、教部省設置、三条教則(三條教憲)発布、大教院設置 1873 巫女禁断令(教部省達)</p>	<p>1872 神祇省・官教使廃止、教部省設置、三条教則(三條教憲)発布、大教院設置 1873 巫女禁断令(教部省達)</p>	<p>1872 神祇省・官教使廃止、教部省設置、三条教則(三條教憲)発布、大教院設置 1873 巫女禁断令(教部省達)</p>	<p>1872 神祇省・官教使廃止、教部省設置、三条教則(三條教憲)発布、大教院設置 1873 巫女禁断令(教部省達)</p>	<p>1872 神祇省・官教使廃止、教部省設置、三条教則(三條教憲)発布、大教院設置 1873 巫女禁断令(教部省達)</p>	<p>1873~ 内務省が連門教を「淫祠邪教」として取り締まり強化。教派への所属を輪旋。(大成教へ)</p>	<p>1872 日蓮宗</p>	<p>不受不施派を除く全日蓮門流の宗号</p>
<p>1868~ 徐々に形成、1875 確立 神道独立教派十四派(神道事務局およびその中心教派たる神道大教院が他の諸教派を統轄。既に「~教」を名乗る教派も含め、全ての教派は「神道」の別派特立の形をとる。)</p>													
<p>巫女神道・巫女教とその神事たる巫女神楽・巫女舞は「淫祠邪教」とされ、巫女禁断令が発布され、巫女と巫女神道諸家およびその神事が革滅的となった。かつ右記独立教派に強制配属・分散された。このとき、吉備の巫女の多くは、当然のごとく同郷の黒住教や金光教に配属させられた。一方、</p>	<p>神道中心の神仏(ないし)神信仏(合同布教、大教院(神道総本山)による)歌人・俳人の</p>	<p>★物部神道系 ★神宮(伊勢神宮)系 ◆神宮内宮を総本社として神明神社を統轄。近代以降の神宮の動向は、国家祭祀の主宰者と位置付けられた天皇との関係から、一層、旧荒木田神道(伊勢内宮神道、皇大神宮神道、外宮神道、豊受大神宮神道)に対する地位をもつて推移する。</p>	<p>★古代出雲系</p>	<p>★伯家神道系 ◆但し、伯家神道の最深奥義たる第一種相伝は行われず。</p>	<p>★大中臣神道、古代吉備系、吉備巫女神道・シャーマニズム、親伊勢神宮</p>	<p>★視系・御嶽信仰系・御嶽信仰系・御嶽信仰系・御嶽信仰系(教団・信仰集団連合)で、科学的思考、実用主義を折衷</p>	<p>★富士信仰、御嶽信仰</p>	<p>上記</p>	<p>上記</p>	<p>上記</p>	<p>★山岳信仰、修験道系 ★御嶽信仰系(御嶽講) ◆修験道を禁止した明治政府の神祇制度に対し、御師・山伏(修験者)の再興運動を展開。</p>	<p>1874 日蓮宗一教派 1874 日蓮宗勝劣派 1874 勝劣五派</p>	<p>1874 教部省が日本神宗を臨濟・曹洞の二宗と定め、黄髮宗を強制改称。</p>

<p>シャーマンであった祖母の神託を自覚したことが教派創始の契機となった同郷の芳村正業の神道教に運良く配属された巫女らは、正業の深い理解と配慮により、秘伝秘儀をよく保った。次輩に、巫女たち自ら教派神道に所属して秘伝秘儀を維持するようになった。</p> <p>残る巫女に対しては、欧米の宗教者の妻としたり欧米の魔術師(魔女)に転向させたりする形での国外追放と家系根絶が行われた。</p> <p>しかし、1900年前後から、次第に巫女ら自ら神秘主義サロンや西洋魔術結社に出向くようになり、そのまま現地に定着した巫女もいる。現代西洋秘術学の母国である「黄金の夜明け団」その分派でキリスト教神秘主義の「聖黄金の夜明け団」や「薔薇十字同志会」、儀式魔術の「暁の星」、セラマ神秘主義の「鏡の星」や「東洋神殿修造会(東方聖堂騎士団)・グレース・カトリック教会」などは、巫女たちの最後の所属先の代表例である。これらの一部の集会は、中世ヨーロッパで信じられていた魔女の宴会(魔宴)にちなみ、「サバト」を名乗っている。自分たちを魔女と自覚している例である。</p>	<p>本田重学 (本田神霊学)</p>	<p>管理統制</p>	<p>1875 神仏合同布教禁止令、神道事務局設置、皇大神宮通拝殿(のちの東京大神宮)の中央神殿化構想、大教院解散</p>	<p>1875 神道事務局、神道大教院</p>	<p>1873 出雲大社敬神講 → 1876 大社敬教会</p>	<p>【東宮派】 1872 吐舌加美講 → 1873 身禊講社 → 1877 廣教社、廣教事務局【坂田派】 1874 惟神教会(内部分裂。身禊講社内に組織。)</p>	<p>1879 大成敬教会</p>	<p>1873 修成講社 → 1876 神道修成派 ◎別派特立</p>	<p>1876 黒住敬(神道黒住派) ◎別派特立</p>	<p>1878 実行社</p>	<p>代々講 → 1873 御嶽敬教会</p> <p>一山講 → 富士一山講社 → 富士一山敬教会 → 扶桑敬教会</p>	<p>日蓮宗興門派(日興門派、富士門派)、妙蓮寺派(日什門派)、本成寺派(日障門派)、八岳派(日龍門派)、本勝寺派(日真門派)</p>	<p>臨濟宗貫業派</p>
<p>近代に作られた巫女神像</p>	<p>古代出雲系巫女神道(鳥根、鳥取、岡山、広島)</p> <p>古代吉備系巫女神道(岡山、山陽全境、備前備中)</p>	<p>神道総本山構想</p>	<p>1877 教部省廃止、内務省社寺局へ移管</p>	<p>管長(神道事務局およびのちの本局): 稲葉正邦 ★解散した大教院を独立教派に再編、全独立教派の中心教派とした。二条教則(三条教憲)を継承。稲葉正邦は、復古神道の平田鐵風門下。</p>	<p>1880 神理敬教会</p>	<p>1880 神智敬教会</p>	<p>1880 神智敬教会</p>	<p>1880 御嶽敬教会が平山省斎の大成敬教会へ合同。所興。下山は御嶽敬教会長を退任。</p>	<p>1880 御嶽敬教会が平山省斎の大成敬教会へ合同。所興。下山は御嶽敬教会長を退任。</p>	<p>大教院大講義の尖野半が創始。神道事務局会計課長、扶桑敬初代管長に。 ★富士信仰系(富士講、身祿派不二(富士)道)、平田鐵風門下。</p> <p>江戸浅草の油問屋、下山成助が創始。初代敬教会長。 ★御嶽信仰系(御嶽講)</p>	<p>1876 政府が日蓮宗不受不施講門派の再興許可。</p>	<p>1882 政府が日蓮宗不受不施講門派の再興許可。</p>	
<p>1882 事実上の国家神道(神社神道、祭祀神道、皇霊神道)概念の確立:一元的外在制約的に基づく</p>	<p>1880~81 祭神論争(明治天皇の勅諭により、出雲派に敗北させる形をとって取捨) 1882 皇典講究所</p>	<p>神仏分離策、廃仏毀釈</p>	<p>1880~81 祭神論争(明治天皇の勅諭により、出雲派に敗北させる形をとって取捨) 1882 皇典講究所</p>	<p>1880 豊前国の神道家出身で、「皇国神道」家・歌人の佐野経彦(基部経彦)が創始。 ★古神道、巫部神道、物部神道</p>	<p>1880 出雲派(祭神五柱、團頭一如を主張)</p>	<p>1882 事実上の国家神道(祭神五柱、團頭一如を主張)</p>	<p>1882 事実上の国家神道(祭神五柱、團頭一如を主張)</p>	<p>1882 事実上の国家神道(祭神五柱、團頭一如を主張)</p>	<p>1882 事実上の国家神道(祭神五柱、團頭一如を主張)</p>	<p>1880 御嶽敬教会が平山省斎の大成敬教会へ合同。所興。下山は御嶽敬教会長を退任。</p>	<p>1882 政府が日蓮宗不受不施講門派の再興許可。</p>	<p>1882 政府が日蓮宗不受不施講門派の再興許可。</p>	
<p>1882 事実上の教派神道(宗派神道、宗敬神道、敬田神道)概念の確立(六教派の別派特立による。)</p>													

<p>右記のような明治天皇個人の、言霊学や神代文字、竹内文書を中心とする偽書・オカルト・神霊学への興味・心酔は、岡山県・山陽・瀬戸内海沿岸地域の巫女神道にも甚大な影響を与えた。すなわち、秘教神道を取り入れた吉備・山陽の平田神道や、伯家神事秘法系(道化参神傳教会、和学教授所)や、創唱系の教派神道(天理教、金光教、黒住教)や、本田霊学とその弟子系列(大本、神道天行居、三五教、ひかり教会、神政龍人会など)や、に所属していた巫女らは、「淫祠邪教」「逆賊」として激しい巫女禁断策に晒された。</p>				<p>だが、山本秀道に始まる修験道系言霊学も、御製の「言の葉の誠の道」を信じた山腰弘道・明符父子による神代文字・竹内文書研究も、その他の研究者による古史古伝研究も、武智時三郎の童謡・歌謡研究も、西原敬昌の子レバシー修行も、全てが天皇の彼らへの庇護と天皇への彼らの崇敬が生んだ産物である。これらの活動の多くは大正・昭和天皇の御代のものであるが、基礎を与えたのは明治天皇である。三天皇自身は、民の思想・教団の是非・正邪・真偽を判断せず、それを実行したのは専ら政府・軍部である。</p> <p>但し、政府・軍部に目を付けられ「淫祠邪教」「逆賊」として排斥・弾圧されたのが、天皇個人が心酔せず忌避した思想・教団ばかりであること、一方で、天皇が好んだ思想・教団は、たとえ異様教義であっても放任・放免されたことには、注目すべきである。</p> <p>排斥・弾圧された主な思想・教団は、幽界信仰を強化した一部の平田派、これと手を結んだ門人らにより白川家の世襲禁止後も生き残った伯家神道流派(すなわち、平田萬胤・護国学頭よりも後の一層秘教化した伯家神事秘法を継承した道化参神傳教会、和学教授所など)、創唱系の教派神道(天理教、金光教、黒住教)、伯家神事秘法一派の本田霊学とその弟子系列(大本、心霊科学研究会、神政龍神会、神道天行居、神仙道本部、古神道仙法教、三五教、ひかり教会など)である。但し、金氣道だけは、本田霊学・大本系であるにもかかわらず、皇族・華族・軍人らが支援し、また入門した。これらのほぼ全てが、岡山県・吉備・山陽系の天之御中主神・国常立尊信仰と伯家神道霊学に源流を持ち、主に高浜清七郎とその門人らによって開拓された系統であることは興味深い。明治天皇の極端なオカルト趣味と吉備神道への本能的嫌悪は、吉備とヤマトの太古以来の神道との関係から見ても、決して偶然ではない。</p> <p>引き続き、後述。</p>		<p>1890 神道丸山教 ◎本局所 (神道本局所) 一戦後、丸山教へ</p>																		
		<p>伯家神道と神道霊学が結託し、高浜清七郎ら岡山の伯家神道派を中心に、国家神道に抵抗し、生き残りをつける。次第に、清七郎自ら伯家神事を伝授して回った教派神道にも対抗。</p>			<p>政府が、日本の近代西洋化・軍国主義に反対する丸山教への弾圧を開始。計画中の教派神道から排除する方針を固める。教団は衰退。但し、大日本報徳社に近づき、報徳思想を唱え、神道系教団としてかろうじて存続。</p>																			
<p>出口王仁三郎が本田霊学、伯家鎮魂法、言霊学を修める中、出口なおの神懸り体質は強化されるばかりで、なおは金光教との協力関係を築き、その教義に基づき自身霊的体験の解釈を始めた。そのため立教前の大本の思想は、金光教の教義と本田霊学の折衷であった。やがて、なおは金光教を離れ、大本は王仁三郎の思想体系そのものとなっていく。</p>		<p>本田親徳から霊学と伯家鎮魂法の相伝を受けた長澤雄輔が、出口王仁三郎に相伝。王仁三郎は、山口志道の言霊学にも影響を受け、その孫弟子の大石凝真素美に直接学んだ。</p>		<p>1889 神官同志会発足。のち全国神職会に発展。 1889 大日本帝国憲法公布 1890 施行</p>																				
			<p>国家神道(事実上の神道国教化)の確立</p>	<p>国家神道(非宗教とし、内務省神社局、次いで内務省外局の神祇院が統轄。一符一社制。天皇家に關係ある神々への祭神の書き換え。)</p> <p>教派神道(神宮教解散以降、別称「神道十三派」。宗教とし、内務省宗教局が統轄。)</p>																				<p>全てのキリスト教系教団</p>
<p>吉備の神霊学的巫女神道と個々の巫女らは、巫女禁断策の中でも天之御中主神・国常立尊信仰を主眼に置き、更に太古</p>					<p>1890 國學院(皇典講究所内) 一國學院大學</p>		<p>1894 神理教 ◎御嶽教から独立 初代管長: 佐野経彦</p>	<p>神宮教の国家祭祀への関わり(神宮大森頒布)に批判を生じる</p>		<p>1894 覆教(神道覆教) ◎神道本局から独立</p>			<p>1894 蓮門教事件(催眠商法による「御神水」販売)に対し、内務省が取り締まりを強化。黒岩派香御判の『萬朝報』なども、蓮門教として非難。神道大成教は島村光津の神道教師の資格を刺奪。) </p>					<p>大道教会(分派)</p>						

<p>神法のように、幽界界と地上界を行き来るとされる秘法も継承した。そのため、当初は概ね、地元や畿内の創唱宗教(黒住教、金光教、天理教、大本など)に親和的であった。しかし、あくまでも復古神道や国家神道ではなく、太古神道のシャーマンズムに依拠することを旨としたため、神道色を排除し近代スピリチュアリズムに向けた金光教や天理教に対しては、懐疑的立場をとるようになった。教派神道では黒住教と良く親和し、多くの巫女が祭祀に参加した一方、天理教については神道とは見なさなかった。のちに、天理教自らが非神道を認める宣言を出して、教派神道系を脱することになる。但し、天理教の孫分派教団であるほんぶしんが岡山を本拠として以降は、一部の巫女が参加している。</p> <p>一方、巫女禁断令によって欧米に渡り、定着し、職業魔女化していた日本の巫女ら一派は、サタニズム(悪魔主義)や神哲学・人哲学などによって日本(近代神社神道・国家神道)を呪う儀式を始めていた。その際、吉備の秘教神道の巫女らも、一時帰郷した元盟友の魔女らに、あくまでも神道儀式の立場からではあるが、秘かに協力した。共に吉備の磐座や霊山で魔術を行い、あるいは、一時渡欧して西洋魔術を学んだ。</p>	<p>★古神道、金光教、伯家神事秘法(高浜清七郎・岡山・山陽派)、鎮魂神神、齋神学、大日本皇道立教会、本田霊学系、言霊学、修験道、神道大成教、キリスト教(立教は二大教祖である男系女性シャーマン・出口なおと娘婿・出口王仁三郎個々人の神懸りと天啓によるとされる。出口なおは期祖とも、但し、教団化・組織化は専ら王仁三郎による。)</p> <p>◆『大本神論』、『霊界物語』、国常立尊復活論、南朝正統・復活論、終末論。宮中関係者や陸海軍将校が共鳴し参加。第一次・第二次大本事件により、極端的弾圧を受ける。一部は吉備・山陽の巫女神道に入り、秘伝化。</p>	<p>高浜清七郎が御殿、娘婿の宮内忠正が整備 ★伯家神道、神道霊学 ◆伯家神事秘法の維持継承</p>		<p>1898 全国神職会 →大日本神祇会</p>	<p>天理教の急拡大により、本局教師の三分の二を天理教教師が占める。(右記へ)</p>	<p>1895 神道同志会</p>	<p>神道同志会</p>			<p>神道同志会</p>	<p>神道同志会</p>	<p>神道同志会</p>		<p>神道同志会</p>	<p>1895 日本教世軍</p>
	<p>のちの神道天行居集団が大本を離脱し、非劇唱系の純粋復古神道系教義に転向、吉備の一部の巫女も、同様の行動をとった。</p>	<p>出口王仁三郎が教団拡大。政府から国家・皇室転覆画策教団と見なされ始める。</p>	<p>霊術・魔術団体(太古神道、岡田式前座法、霊界俱樂部、霊学道場)</p>	<p>1899 神道懇話会</p>	<p>◆神社非宗教論 1898 神祇官興復運動、神祇特別官街設置運動により、全国神職会(のち大日本神祇会)を組織。1900年、社寺局から神社局を分離設置。国家神道が名実共に確立し、神社局がこれを保護(事実上の管理統制)。神官は公務員とされ、布教活動は禁止。これ以降、「国家神道」の語が頻用される。社寺局は宗教局へ改組。</p>	<p>神宮教が解散 神宮奉斎会 神道同志会脱退 神宮教院大本部および神宮奉斎会本院による神宮運営</p>	<p>1899 神道懇話会</p>	<p>1900 金光教 ◎神道本局から独立</p>	<p>神道懇話会</p>	<p>神道懇話会</p>	<p>神道懇話会</p>	<p>神道懇話会</p>	<p>日蓮宗興門派 →1899 本門宗</p>	<p>岡山で誕生、発祥。(教世軍の日本における組織的活動として、山室軍平らが布教・創始。)</p>	
<p>太古神法</p>	<p>1906 神道大成教直霊教会(神道大成教所屬)、御殿教大本教会(御殿教所屬)、金明霊学会→大日本精霊会</p>	<p>田中守平、岡田虎二郎、松本道別らが霊術団体を創始。松本道別に香川出身の女学・老荘思想研究者の清水宗徳が入門。</p>	<p>1906 全神教體大日本世界觀、靈感會(みいつかい)</p>	<p>1890 皇道會 総裁:久遠宮朝彦親王 会長:中山忠英 →1911 大日本皇道立教会</p>	<p>天理教独立により、規模が矮小化</p>	<p>1911 大日本皇道立教会</p>	<p>1911 大日本皇道立教会</p>		<p>1908 天理教 ◎神道本局から独立</p>	<p>1900 御殿教天都教会(御殿教所屬) →皇祖皇太神宮天澤教</p>	<p>1908 天理教 ◎神道本局から独立</p>	<p>1900 御殿教天都教会(御殿教所屬) →皇祖皇太神宮天澤教</p>	<p>公編廃止運動(廃編運動)、純潔運動をめぐって、同郷の巫女らと意見が対立。(左記)</p>		
				<p>◆南北朝正間論の復活と南朝正統、北朝傍流を主張。初代会長:中山忠英 副会長:千家尊福 委員:中山忠宗、大隈重信、東郷平八郎、一木喜徳郎、牧口常三郎、戸田城聖、児玉誉士夫、華族、陸軍軍人 一門下、後継団体(現皇統打倒、南朝皇統への移行を主張したことのある教団)...</p>		<p>北朝系明治・大正天皇を敵く政府に対抗して上記設立に関与し、出雲大社・千家尊福が副会長に就任。祭神論争で天照大神信仰(伊勢内宮神道)に対する国常立尊・大國主命信仰(出雲神道)の全面的敗北が決定したことに伴い、今度は苦肉の策として反北朝、南朝正統論に転じ、一部の皇族、華族、軍人らと策謀したものを。</p>									

昭和時代

上記のような動向は、山陽発祥の社会福祉事業においても同様であった。

神戸出身のキリスト者で、日本初かつ日本最大の生活協同組合「コープこうく」（神戸購買組合が由来）の創設者である賀川豊彦は、貧民救済運動、被差別部落解放運動、無病運動も行ったが、これは賀川が優生学に傾倒し、貧民や部落民、癩病患者を「遺伝的に劣等で、キリスト教によって救われるべき（優生学によって人種改良されるべき）可哀な人々」と見なしていたからである。

賀川らの運動は、結局は貧民・部落民、癩病患者淘汰論・排娯論であり、賀川自ら差別表現・優等語を多用して運動を展開した。とりわけ、癩病患者に対する賀川の差別と排除願望は徹底しており、療養所への患者の隔離・強制収容の強行を主唱し、慰問を口実にキリスト教を強引に布教した。

国内初の国立療養所は岡山の長島愛生園であり、無病運動・患者の隔離運動に同僚の巫女らが多数巻き込まれた。巫女らは次第に、同僚、医師、賀川らが推進するこれらの運動の偽善と差別主義に気づき、厳しく抵抗した。

また、1947年、賀川が『婦人公論』で、米兵による強姦の被害女性を「闇の女に堕ちた」「欠陥」女性、赤春婦を「ハンハン」「精神分裂病患者」と侮蔑した際にも、岡山、兵庫など山陽の一部の巫女らが著しく反抗し、賀川や賀川と同様の主張を展開した日本のキリスト教団に対し、呪詛の秘儀を執り行っている。

GHQの神道指令により、神社・神道の国家管理は廃され、吉備の巫女神道も国家・神社神道からの弾圧は受けなくなったが、今度GHQによる日

大木・出口王仁三郎に失望して脱退した矢野祐太郎が創始。妻・矢野シンの霊媒能力を使った実験により『神霊密書』を著し、宮家や同志に配布したところ、竹田宮家や北白川宮家の女人らの勧めで天皇へ御嘉納。

1934 昭和神霊会
軍人、右翼団体と交流し、国政に介入。

神道霊学
エスベラントの導入やヤマ教、ハーレー教との提携など、霊学的コスモポリタニズムに向かう。1935年、第二次大本事件を起こし、国家・皇室の転覆を謀る陰謀結社、「道鏡以来の逆賊」とされ、活動停止となる。

教義の神道
神道天行居とその創設者、友清敬典が自称する霊学をいう。

神道天行居
*伯家神事秘法(高浜清七郎・岡山・山陽派)、本田霊学系

国家神道(事実上の神道国教化)の確立

1938 日本大学皇道学院	1934 教派神道連合会	1936 皇道書塾会 →1940 宗教雑誌皇(すめらぎ、すめらぎ)教	1934 教派神道連合会	1938 天理本道	1935~44 第二次天津教弾圧事件	会長:伴仲実雄
1940 宗教団体法施行、神社局を神祇院へ改組	神道大教	世襲を廃絶され子爵となった白川資長が会長に、伯家神道を学んだ鬼倉足日公が理事長に、伊勢皇大神宮大宮司・三室戸和光の孫で宮中顧問官の敬光と、平田篤胤の曾孫で神田明神宮司の平田盛胤が副会長に就任。 ★伊勢内宮神道・平田神道・伯家神道の統合、斎王・倭姫命信仰 ◆但し、伯家神道の最深奥義たる第一種相伝は行われず。	神宮皇學館大学 一皇學館大学	1936 天理本道	1935~44 第二次天津教弾圧事件	会長:伴仲実雄

表向きは日蓮正宗から破門された法華講系教団だが、原点は大日本皇道立教会急進口戸田ら幹部による南朝復活、北朝系現皇統打倒、国体改造計画集団。当初、岡山の大森毅や山陰神道などが支援するも、決別。現在、原点を知る幹部や学会員は少なく、むしろ自公政権の一翼を担う公明党の最大の支持母体(ほぼ結党主体)であるが、布教の手法などが問題視され、広く日本最大の教団と評される。

1941 日蓮宗(三派合同)
1941 法華宗
1941 本化正宗

宗教団体法施行により、旧日蓮宗(一致派)、本門宗(富士門流、勝劣派)、顕本法華宗(日什門流、勝劣派)が合同し、日蓮宗に。本門法華宗、本妙法華宗、法華宗が合同し、法華宗に。不受不施諸門派と不受不能派が合同し、

<p>本の危険かつ異様な習俗の研究の対象とされた。天皇崇拜や鬼畜米英思想、戦勝祈願祭祀への巫女神道の関与が疑われたが、政府、教省、大教院、神道事務局などによる巫女弾圧策が明らかになった一方、巫女の戦争関与は見当たらず、無罪放免に終わった。</p> <p>巫女らは今度は、反神社本庁・反神道政治連盟の立場から、その現代神社神道に対する巫女神道の霊的防衛を唱える立場となった。</p> <p>山口での神道天行居の設立以降、吉備の巫女もその霊的国防の集団秘術訓練に参加している。しかし、巫女らは国粋主義的・民族主義的思想には協力しておらず、やはり霊的自衛・呪詛の対象としているのは、日本政府や神社本庁である。ユダヤ陰謀論を唱える神道天行居は、欧米の反ユダヤ系神秘主義から、当然何度も同盟を求められている。</p>	<p>★復古神道、伯家神事秘法(高浜清七郎・岡山・山陽派)、本田壘学系、太百神法、高王神道、密教</p> <p>◆元大本系、のちに反大本、霊的国防、ユダヤ陰謀論(武力でなく霊力による国防を唱え、政府・大本當はこれを引き継ぎ邪視・強圧)。清水宗徳も参加。巫女に加え、男子のおかんなぎの霊力をも重視。</p>	<p>1945 震雷流</p>	<p>神仙道本部(宮地神仙道)</p>	<p>宮地水位・巖夫・威夫の世襲を経た後、神道天行居を離脱していた清水宗徳が継承。のち、竹川文男が継承。</p> <p>★神仙道、道術</p>	<p>ひかり教会</p> <p>三五(あなない)教</p>	<p>1945 神道指令(GHQ)</p> <p>神社の国家管理の廃止、宗教団体法廃止、宗教法人令公布・施行</p>	<p>1946 宗教法人神社本庁の発足</p>	<p>1946 宗教法人神社本庁</p>	<p>飯田橋大神宮を宗教法人東京大神宮へ改組</p>	<p>神宮(伊勢神宮):神社本庁本宗</p>	<p>1946 スメラ教 →1947 すめら教</p>					<p>1946 大日教</p> <p>1946 丸山教</p>	<p>1946 天津巨</p> <p>1948 円応教</p>	<p>本門佛立宗 →1948 本門佛立宗</p> <p>日蓮宗不受不施派 →1948 妙法華宗 →1952 日蓮宗不受不施派</p> <p>日蓮宗不受不施門派 →1948 日蓮門宗</p>	<p>本化正宗に、旧日蓮宗が白蓮宗、法華宗、本化正宗の三派に整理統合される。</p> <p>本化正宗が再分派</p>
<p>巫女神道、巫女神道霊学、巫女御教神道</p>	<p>産須夜教会 →神道仙法教 →古神道仙法教</p>		<p>岡本天明創始。岡山県浅口郡玉島出身。千葉県印旛郡公津村台方の麻賀多神社の末社・天日津久神社で「日月神示」を自動書記。</p> <p>★伯家神事秘法(高浜清七郎・岡山・山陽派)、鎮魂婦神、審神学、本田壘学系</p>	<p>◆大日本神祇会、皇典講究所、神宮奉斎会などの解散統合による設立</p>	<p>出雲大社教</p>								<p>教制審議会(政府・国家神道からの弾圧対策として定めた神道的教義を解体、神道色を復興)</p>	<p>天理教復元(政府・国家神道からの弾圧対策として定めた神道的教義を解体、神道色を排除し、立教時の教義を復興)</p>	<p>明治政府による修験者への弾圧以後、丸山教は、あえて富士信仰(富士講、身祿派不二(富士)道)に代えて報徳社運動を看板として生き残り、戦後は平和主義・反核運動を展開している。</p>	<p>円応修法会(臨濟宗妙心寺派霊雲寺)と円応報恩会が合同。</p>	<p>旧法華宗 →1951 法華宗門流 旧本門法華宗 →1951 法華宗本門流 旧本門法華宗久遠派妙蓮寺 →1951 本門法華宗 旧本妙法華宗 →1951 法華宗真門流</p>		
<p>合気道 (1948 合気会)</p>	<p>1952 大本</p>	<p>1946 日本国憲法公布</p> <p>1947 施行</p> <p>1947 宮内省を宮内府へ改組(内閣総理大臣所轄)。宮内省掌典職が内廷機関としての掌典職となる。</p> <p>1949 宮内府を宮内庁へ改組(総理府設置法の施行により、同府の外局となる。)</p> <p>1951 宗教法人法公布・施行</p>	<p>神道天行居と、そこから分離独立していた清水宗徳の神仙道本部の双方を離脱した正井順益が創始。</p> <p>★平田神道、宮地神仙道、道術</p>	<p>大本の信者・中野與之助が独立して創始。静岡県清水市における世界宗教創始の天啓を受け、同地に立教。</p> <p>★大本、伯家神事秘法(高浜清七郎・岡山・山陽派)、鎮魂婦神、審神学、本田壘学系</p>	<p>1946 日本国憲法公布</p> <p>1947 施行</p> <p>1947 宮内省を宮内府へ改組(内閣総理大臣所轄)。宮内省掌典職が内廷機関としての掌典職となる。</p> <p>1949 宮内府を宮内庁へ改組(総理府設置法の施行により、同府の外局となる。)</p> <p>1951 宗教法人法公布・施行</p>									<p>1950 ほんみち</p>	<p>1952 皇祖皇天神宮天澤教</p>		<p>旧法華宗 →1951 法華宗門流 旧本門法華宗 →1951 法華宗本門流 旧本門法華宗久遠派妙蓮寺 →1951 本門法華宗 旧本妙法華宗 →1951 法華宗真門流</p>		

植芝盛平創始。
★武道、柔道、大東流合気柔術、観英体道、大本
◆盛平が大木に入信。三郎の勧めで京都に「合気武術」の道場を設立。東京に移住し、皇武館道場設立。皇武会、次いで合気会となる。

巫女禁断令によって欧米諸国に渡った巫女らの娘や孫は、もはや日本の巫女ではなく欧米の魔女として生を受け、祖母や母により、あるいは現地の神秘主義サロンや西洋魔術結社の中で、魔術を教えられて育つこととなった。東洋や日本の多神教的神秘主義に触れた欧米側でも、ネオペイガニズムが興り、ウィッチクラフトやワイオスマジックといった新たな思潮が生じた。これらが現在のニューエイジにつながるが、吉備の巫女神道は、太古のシャーマニズムに依らないスピリチュアリズムに対しては、金光教や天理教、大本に対するのと同様に、抵抗し続けている。

新生法華宗からの再分派。旧本門法華宗久遠派の妙蓮寺一派がさらに分派。

1956
天社山蔭神道愛信会
→1966
(天社)山蔭神道

★太古神道、山蔭家神道直系、陰陽道、本田聖学、大日本皇道立教会
◆中臣鎌足以来、大中臣・卜部の両神道内で存続。概ね吉備・岡山を本拠とし、南北朝合一後は南朝正統・復活論を唱えた。同様の思想を持つ近代の華族・軍人結社である大日本皇道立教会を父・中山忠英(初代会長)から継いだ忠徳が、山蔭家第78世ともなり、南朝正統論の立場を確立。岡山県都窪郡の御崎神社で応神天皇以来の吉備山蔭神道の秘法を門人に伝授。その一人、山蔭基央(岡山出身で、皇典講究所で学ぶ)が、1946年、忠徳の養子となり、1949年、山蔭神道宗家としての山蔭家を正式に創設し、第79世を継ぐ。勸告されかけられるも、忠徳の教えに基づき吉備・関西を移動・巡礼し、改心。愛信会を創設し、岡山から愛知県額田郡に入り、貴嶺宮で山蔭神道を再興。大元堂・大元尊神(造化三神)を信仰し、天照大神の上位に置く。同時に、急速に本田聖学の「一霊四魂」直霊思想、中国の古占法・四柱推命、ヨガなどを取り入れ、日本心靈科学協会と親和。一部は「アジマリカン」(造化三神の産霊のはたらきを表す言葉)信仰、応神天皇初代天皇論に至る。ユダヤ陰謀論では神道天行居と親和。皇道立教会・中山家時代の影響で、一時は現皇統打倒・国家転覆論に傾いた。これらの変質をもって、岡山から入った巫女らの一部は離脱・帰郷。

★伯家神道系

教派神道連合会

教派神道連合会

教派神道連合会

1961 天理みろく会
→1962 ほんぶしん
(石記へ)

大和本学

造化參神傳教授所、高浜神傳会、伯家神道愛信会、玉辭会

1949 心靈科学研究会
→1959 日本スピリチュアリスト協会

1989 神道政治連盟

神社本庁、都道府県神社庁、およびこれら傘下の全ての神社

教派神道系以外の大規模単立法人の神社

神道大教

神理教

神宮(伊勢神宮):神社本庁本宗

出雲大社教

讀教系

神習教

土御門神道→天社土御門神道

神道大成教、神道修成派

大本

金光教

黒住教

天理教

1961 天理みろく会
→1962 ほんぶしん
(ほんみちから分派独立)

御座教、扶桑教、實行教

1956 連合会加盟

巫女禁断策によって家業(巫女)を断絶させられた一部の吉備の巫女(すなわち現在は一般女性・女子)は、皇學館女子短期大学の創立時、協力や入学をしてその国文学系分野の発展に尽力したが、やはり長きに亘る非国家神道・非神宮(特に非内宮)の立場を捨てることはなく、すでにノーダム清心女子大学などの岡山・山陽の女子大学への協力を転向した。

巫女神道家およびその巫女らは、神社本庁や特定の単立神社を中心とする戦後の神社神道の神道観、そして昭和末期のオカルトブームに押されつつも、太古神道と各家・各系統に伝承される秘儀秘伝を融合させた女系巫女神道を継承し、極めて小規模ながら、生存を続けている。

これら全てが、高浜清七郎(岡山県総社市出身)を中心とする岡山県・吉備・山陽系の伯家神道派からの分派教団・組織である。和学教授所の中村新二・安見晴子の母娘間の相伝以降、各分派でも女系世襲継承への転向が見られる。但し、新子と交流のあった長等神社宮司・新宮幸勝や、清七郎の曾孫・浩(晴子の弟)も伯家神道を修め、これら三系統の全てが七澤賢治の師となり、七澤は伯家神道の全秘法を修める。

1959年(白川資長逝去)前後の和学教授所の役員総監・子爵・白川資長所長・神事長・中村新子神事長代理・安見晴子理事・新宮幸勝

大和本学は、和学教授所を破門された小笠原大和が創始。和学教授所と同じく、女性門人が多い。

和学教授所、白川学館、言霊神社、鎮魂道場、和学国際センター、言霊学会(後)七澤研究所、(後)ロゴストン研究所、和禰出版(株)など

七澤賢治の言霊学は、これらの団体に継承され、新言霊学「LOGOSLOGY(ロゴソロジー)」が唱えられ、様々な科学・テクノロジーとの融合が見られる。一方、伯家神道側から見れば、これら全てが、高浜清七郎(岡山県総社市出身)を中心とする岡山県・吉備・山陽系の伯家神道派からの分派教団・組織である。清七郎の伯家神道再興の試みは、その意思に反して、元より神道色が希薄であった金光教や天理教、言霊学、偽書研究勢力への伯家神道秘法の過剰流入や、これらの教団・組織への伯家神道の秘伝書物の売り飛ばしを招き、これらの教団・組織によって伯家神道が歪められ、伯家神道そのものが異様なオカルティズムであると誤解される事態を招いた。その傾向は、現代においても継続している。

1965 第三文明会、1981 言霊神社、鎮魂道場

2001 宮内庁が内閣府設置法の施行により、同府の独自の機関となる。

1986 皇學館女子短期大学→1970 皇學館短期大学

現在に至るまで、観教、神道種教(経教真派)、観教会、それらからの一次・二次・三分派団体・単立宗法人など、多数の教団に分裂したまま、観教教団所在地の身置神社はかむむがらのみちの所有となった。

1959 連合会 脱退
1994 連合会 復帰

★土御門神道の復興
◆宗教法人としての本庁は福井県おおい町の土御門家旧領にあるが、法人構成員は土御門宗家の家系ではない。明治から教派神道教団としての独立を目指すも、叶わず、最新の『宗教年鑑』でも、教派神道系ではなく諸教に分類される。

1964 旧大成教所属の連門教系教団が解散し、法華神道系宗教法人が消滅。1976 大成教が連合会脱退。

1970 連合会脱退(神道でないことを自ら表明したため、文化庁『宗教年鑑』でも教派神道系から諸教に分類変更。) 奈良で誕生(大西王)、発祥。大阪、長野へ移転、岡山

★天理教、ほんみち(立教は男性女性、シャーマン、教祖個人の神懸りによる、かつ天理教・ほんみちと同様、神道色は極めて希薄)

単立宗教法人には、神社本庁系神社とは異なる個性的な祭祀を形成している神社もある一方、靖国神社参拝問題など、公人の参拝と信教の自由をめぐって国民感情を二分する問題も発生している。

昭和末期、創唱宗教系の教派神道系教団や新宗教教団は、当時国民の間で流行したオカルティズム・超常現象・心靈現象ブームを多分に利用して教団の宣伝と拡大に走り、教義もこれらと区別の付かないものとなり、神道・仏教教団とは言えないものに変質した。1970年の天理教の非神道宣言と教派神道連合会からの脱退はその有名な例であるが、逆に神道・仏教系の教義を踏襲しながら、実態はオカルティズムに他ならない教団が多数存在する。これはキリスト教系教団にも言えることであり、教祖とその血統を神聖視し、霊感商法に走る教団も多く登場した。さらには、超能力、透視能力、心靈現象、ムームー大陸伝説などを巧みに取り入れた教団やオカルト雑誌、テレビ番組が登場し、一世を風靡した。ついには、チベット密教系新宗教のオウム真理教が、日本政府や国民による教団への攻撃を既存のものとして捏造し、天皇の廃絶、日本政府の停止と、教祖を首長とする新国家樹立を図り、無差別殺人事件(松本サリン事件、地下鉄サリン事件など)を引き起こした。

上記の小笠原による言霊学大成の試みで漏れたのは、伯家神道系各派や三五教であるが、これは伯家神事行法の修行中だった小笠原の弟子・七澤賢治によって試みられた。小笠原は七澤に言霊神社の創設と神剣「言霊の剣」の製作を命じた。七澤はこれに答えた後、伯家神事行法と三五教系の鎮魂鬼神法・言語学を修得し、小笠原言霊学にこれを融合させた。神道天行居も試みから漏れたが、その反ユダヤ主義が七澤の「布斗麻蓮」による万教一教の神の法則と相容れず、最後まで取り込んでいない。

岩崎道統 図へ

岩崎道統 図へ

岩崎道統 図へ

巫女神道、巫女神道、巫女神道、巫女神道

女系巫女神道家(および巫女)の所屬先および巫女の供給先の教派・教団

:明治政府による巫女禁断・弾圧策に基づく強制配属先(供給先)と、これに反発して秘儀秘伝化(秘教神道化)し戦後も残存した場合の配属先(供給先)の教派・教団。但し、令和時代開始時点で残存しており、各教派・教団の祭祀に呼ばれて生計の全部または一部を立てる女系巫女神道家に限る。)

Flowchart showing the lineage of female system Shinto priestesses (女系巫女神道家) from ancient times to the present. It details various branches like 'Ancient Shinto' (古代古備系), 'Ancient Yamato' (古代畿内), and 'Modern Shinto' (現代古備系), tracing their origins and affiliations through different historical periods and religious movements.

岩崎道統図

